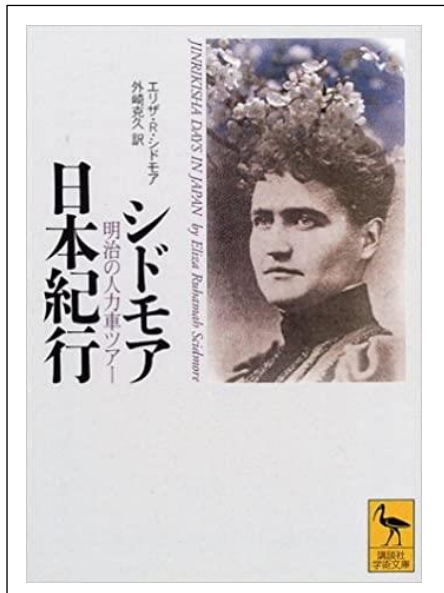


江ノ島を紹介したシドモア

シドモア日本紀行 明治の人力車ツアー

八柳 修之



3月27日は横浜ウォーキング協会の例会「シドモア桜と大岡川桜祭り」の予定であったが、コロナ禍のため中止となった。

大岡川川べりの桜は知られているところであるが、エリザ・R・シドモアのことについてはあまり知られていない。人文地理学者で無類の親日家シドモアはワシントン・ポトマック河畔の桜植樹の大立役者でもあった。1884年(明治17年)、記者として来日して以来、度々日本を訪れ、人力車で全国各地を駆け巡り、鋭い観察眼で明治中期の日本の文化、風俗を欧米に紹介した。自然と共に生きる日本の歳時伝統と日本人の優しい心。日本を愛したアメリカ女性の描く日本印象記の傑作とされる。(はしがき)。なかでも隅田川河畔の桜並木に感銘を受け、帰国後、ポトマック河畔の埋め立て地に桜を植えようと精力的に活動した。1928年(昭和3)ジュネーブで永眠、享年72才、翌年、遺灰は外交官であった兄と母が眠る横浜山手の外国人墓地に埋葬された。 外崎克久訳 講談社学術文庫



大岡川の桜



隅田川の桜



ポトマック河畔の桜

シドモアは「シドモア日本紀行」(Jinrikisha Days in Japan) 1890年)の中で、江ノ島の事についても触れている。文庫本全467頁中3頁に過ぎないが摘記する。

「鎌倉の黄金弓の湾の向こう側に、もう一つの砂浜・片瀬海岸があり、その目の前に日本版モンサンミッシェル、江ノ島がそびえています。江ノ島は満ち潮になると島になります。陸へ向かう方向以外は、すべて絶壁のように海上から切り立っています。絶壁正面は切り裂かれ、深い森に覆われた峡谷となり、谷間は引き潮の際、浜辺とつながって長い砂州となります」



江ノ島・トンボロ



江ノ島栈橋 (撮影年次不明)

コメント: 江ノ島が日本版モンサンミッシェルであることを言ったのは、おそらくシドモアが初めてでは

ないでしょうか。現在、宮島の厳島神社は日本のモンサンミッシェルと称しPRしているが、シドモアは宮島へ行きましたが、一言も日本版モンサンミッシェルとは言っていない。砂州という地理用語も使っているのは地理学者らしい。シドモアはいつ江ノ島を訪れたのでしょうか。「シドモア日本紀行」が出版されたのは1891年（明治24年）ですから、江ノ島を訪れたのは1891年以前のことです。江ノ島と洲鼻との間にはじめて村営の栈橋が出来たのも1891年のことですので、シドモアは引き潮を見計らって江ノ島に渡ったでしょうが、さすが人力車ではいかず、人足におんぶされたか蓮台に乗って渡ったことでしょう。

「他の伝説的な島と同様の江ノ島もわずか一晩で海から隆起しました。島の守護神は七福神の一つ、女神・弁天です。弁天サマは山頂まで森に覆われたこの島のすべての祠で、また海からも見える深い洞窟（岩屋）で礼拝されます。たくさんの日陰の小径や苔むす階段が愛らしい茶店や建て場へと促し、そこにはベンチ、元気づける茶もあって、魅力的風景が展望できます。どこからでも雄大な姿を見せる富士ヤマにとって、近くの浜辺、太平洋の無限の海原、相模湾の壮大な曲線美は、最高の舞台装置となります」

島内は人力車とはいかず籠に乗っての移動か。さすが健脚の駕籠かきといえども、休息した建て場が島内に何カ所かあったようです。

「江ノ島山頂は、英国のアーデンの森に匹敵する優美な色合いの魅惑的場所です。峡谷の斜面の一本道には茶店、貝殻細工店が対並び、巡礼の小旗や幟がヒラヒラしています。貝殻加工の笛、匙、玩具、装飾品、かんざしが並び、さらに見事な桜の花をちやなピンクの貝殻から作り、天然の枝や小枝にしっかり留めた飾り物も売っています」



pixta.jp - 16752855

コメント：英国のアーデンの森とは、ネットで調べてみました。シェクスピアの戯曲「お気に召すまま」(As You Like It)の舞台となった所です。シェクスピアの故郷であるウォリックシャー州エイボンの田園をモチーフとしたアーデンの森に設定したものでした。また、島の頂上には当時サムエル・コッキング園があったようですがシドモアはそのことに触れていませんが、1882年（明治15）、横浜在住のアイランド人貿易商サムエル・コッキングが植物園を開設、1888年には温室が開園しています。（ウイキペディア）

江ノ島の貝殻細工の見事さは、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）も述べているところです。

「江ノ島の魚介類の晩餐は有名で、調理場の天才である日本人は指定した以上に、たくさんのおいしい魚料理を出してくれます。神社境内にはたくさんの建て場が立ち、あるものは崖っぷちにうまくバランスをとりながら店開きをし、そこで巻貝（サザエ）が食用亀のように黒いシチューをあふれさせ、炭火でぐずぐず煮られています。この食べ物は魅力的な匂いを発散し、巡礼団はインク色の塊を箸で味わっていますが、外人向け日本食リストには日本料理によくあるニカワ質系統の無味乾燥な料理と酷評されています。

江ノ島の海の珍品は、海亀のような巨大な蟹です。鋏の長さは端から端まで3メートルもあり、ものによっては3.6メートルにも及びます。この甲殻類は夜間、砂浜を遊歩するといわれ、目は燐光を発しぎらぎらしています。・・・以下、平家蟹について、悲運に殉じた平家一門の話があるが割愛

コメント：相模湾で蟹が獲れるのか、調べて見ました。「相模湾で採集したカニ類」（池田等）によると相模湾には24科308種のカニが発見されていますが、シドモアのいう鋏の長さ3メートルもあるタカハンガニは生息していません。相模湾で獲れたカニ料理を食べさせるお店が鶴沼石上にあるようです。

「島全体が海浜御所用の皇室御料地でなければ、江ノ島はもっと人気のある夏のリゾートになったと思います。海から襲来する台風が猛威を振るって吹きまくると、大波は島全体を水泡でぐるりと囲み、うなだれる群衆めがけ頂上に水煙を浴びます。大気は荒い呼吸と砕け波のうねりに満ち、全大地が震え、地下の弁天サマは参拝者を追い出します。仕方なく観光客は垂直 200 フィート (61m) の岩屋を見下ろし、入口を塞ぐ海の猛威と渦巻だけを眺めることになります。引き潮や普通の波のときは、岩屋から弁天神社へ簡単に入れますが、台風の脅威に晒されると、岩屋をのぞくどころか観光客は数日間島で軟禁状態となります。

再び、島の頂上へ向かう長く厳しい石段の登りがあります。ガイドは大勢いて、通常老人や少年が不案内な外人一行には付き添って歩きます。彼らはとても親切で、礼儀正しく優しい人たちです。好意的に島の周りを一緒に歩くうちに、なんとなく付き添いの通訳として正式ガイドに昇格し、彼らは最終目的を達成します」

コメント：江ノ島が海浜御所用の皇室御料地とは初耳です。鵜沼が開発前に御用邸の候補地にはなったが、葉山になったということは聞いたことはありますが。 完



稚児ヶ淵 撮影： 木村好太郎氏 (元会員)

木村さん以外の写真は無料画像を使用しました。 八柳 修之